

## 変動帯ならではのユニークな自然観をもった博物館に

延原尊美  
(静岡大学教育学部)

日本列島は4枚のプレートが接する位置にあり、地震や火山活動、土地の隆起や沈降など、地殻変動が活発な、世界でも有数の変動帯となっています。一方、暖流・寒流の双方の影響をうける中緯度帯にも位置していて、地質時代の昔から気候変動にも敏感な場所として環境の変化を受け続けてきました。このように日本列島に暮らす生き物たちは、テクトニクスと気候、二重の意味での「変動」のゆりかごの中で世代を重ねて今につながっています。そのため、彼らはなんらかの形で変動帯ならではの歴史を背負っているはずです。

例えば、ヤマトシジミ(貝)は、日本人にとって重要な食資源ですが、日本の汽水域にのみ生息する日本固有種です。近年、外来種である中国大陸産のタイワンシジミが日本に持ち込まれ、ヤマトシジミの生息場である汽水域にも侵出してシジミ漁への深刻な影響が心配されています。タイワンシジミの味は、残念ながらヤマトシジミに比べるとあまり評判はよくありません。では、ヤマトシジミ独自の味はどれくらいの歴史を経て作られたのでしょうか？

私は教育学部の「専門基礎生活」の授業で、このヤマトシジミを取り扱ったことがあります。この授業は小学校教員の免許状を取得するためのもので、小学校の「生活科」で取り扱える内容について専門的な知識を深めることを目的としています。この授業でとりあげたのは、普段、身近な食材として接している生き物も日本ならではの自然の歴史を背負っていること、外来種によって一体何が失われるのかを考えていただきたかったためです。

ヤマトシジミという固有種が誕生するためには、まずは日本のシジミ類が、大陸のシジミ類と地理的に分断され、独自の集団として進化の道を歩み始めることが必要です。それを考えると日本列島がアジア大陸から分離して日本海が形成されたころ(1600万年前ごろ)から、ヤマトシジミの歴史はスタートしてい

たと言えます。私たちが普段味わっているヤマトシジミの味は、日本海誕生以来、彼らが世代をつないできた中で体験した、汽水環境の水質を左右するであろう流域一帯の地質や、繰り返されてきた気候変動の中で育まれてできた賜物といえるかも知れません。この仮説を検証するには、ヤマトシジミという別の生き物の目線で日本という場所をもっと具体的に捉えることが必要です。でもそれができれば、日本の自然について全く違った景色が見えてくると思います。自然史の研究の醍醐味の一つはここにあると信じます。

自然史博物館には、どんな場所であってもらいたいのか？ 私は、変動帯ならではの自然の歴史を研究し語ることで、自然界の恵みや恐ろしさ、そこに生きるものたちのたくましさ、はかなさ、もろさや愛おしさ、ありがたさを、スタッフも来館者も互いに感じ、考え、深めて行ける場所であってほしいと願います。このような自然観をもった博物館を作ることができるのは、変動帯に生きる私たちにしかできないのではないのでしょうか。ましてや静岡県はテクトニクスでも気候でも、変動の最前線に位置しているような立地条件にあります。地域の宝物は、自然の歴史の中にもあるはず。お金になる・ならないではない、自然史そのものの価値に気づいていくことの大切さ。それを博物館の方々といっしょになって地域の人たちが見つけてゆく営みが展開されていったら、どんなに素晴らしいだろうと思います。絵空事や妄想にとらえる人もいるかもしれませんが、でも未来に向けての原動力だと自分では思っています。

ふじのくに地球環境史ミュージアムが「来てよかったなあ」から、「また来たいなあ」、さらに「来ると何か感じるんだよなあ、落ち着くなあ」のステージへ、ユニークな進化をさらに加速して行けるよう、今後とも応援したいと思います。どうぞよろしくお願ひします。